



ハaremプリズナー

HAREM
PRISONER

小説 竹内けん 挿絵 浅沼克明

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

第一章

孤城落日

006

第二章

戦後処理

043

第三章

陳腐な懐柔方法

081

第四章

主従の絆

122

第五章

運命の女

161

第六章

三つ穴空けた女

205

登場人物紹介

Characters



ネメシス

ラルフィント王国で勢力を拡大しているレナス家の娘。冷たく高圧的な女王様タイプで、捕虜となったヘリオードを翻弄する。



カディア

ネメシスの親衛隊長を務める女剣士。真面目で忠誠心が高い。その反面、性に対しては非常に疎い。



ヘリオード

ラルフィント王国に名を轟かせる若き將軍。祖国への忠義に厚い騎士。



シャーミーナ

ラルフィント王国山麓朝の王女。健気で清純な心優しい少女。昔からヘリオードを兄のように慕っている。

ドゴール領主ネメシスの側近にまで成り上がった彼女は、水晶宮出身の女戦士としては、理想的な経歴を持った優等生とっていいだろう。

「ならばカディア。おまえもこやつで楽しまぬか。こやつ見てくれだけの男だと思っているが、舐め犬としてはなかなか使える」

「はあ……」

禁欲的な女戦士の集団で育ったカディアは、主君の発展的な性生活が受け入れられないのだろう。なんとも複雑な顔をする。

「そうだな。今後、近衛の連中は、こいつに舐めさせて性欲を解消するといい。おぬしらには忙しい思いをさせてかねがね申し訳ないと思っていたのだ。まともに恋人を作る暇もないであろうからな」

ネメシスの提案に、近衛の女たちは戸惑ったように顔を見合わせる。そして、一拍後、黄色い歓声が上がった。

「ちよつと待て！ おまえ、オレの人格とか無視しているだろ！」

「貴様にそんな高尚なものが残されているか。貴様はわたしの玩具だ。人形なのだよ」

股の下の方に対して、口元の涎を手の甲で拭いたネメシスは改めて嘲笑する。

「酷い顔だな。わたしの垂れ流した液体でドロドロになっておるわ。こいつを英雄視している山麓朝の民に見せてやりたいな」

満足げな嘲笑を閃かせたネメシスは次いで、カディアの肩に手をかけて腰を上げると、身体を反転した。男の下半身を見下ろして嘲笑する。

「無様にそそり立っておるな」

「ご主君のおま○こを舐めたのです。当然でしょう」

部下たちのお世辞は聞き流し、ネメシスは手を伸ばすと、ズボンの中から逸物を取り出した。

ブルンツという唸りを上げて巨大な逸物が姿を現す。

「こうなつては収まりがつかぬのであろうな」

左手で髪を軽く整えたネメシスは、右手で逸物を握りしめた。

「ご主君、そのような汚いものを」

「よい」

男に免疫のない側近の制止を振りきつて、男など齒牙にもかけぬといった顔をした傲慢な女は、手にした逸物をシコシコシコと扱き上げる。

「ああ……」

先走りの液がタラタラと垂れて、ネメシスの手を汚した。

「英雄、軍神と称^たえられても、所詮は男。チンポを掴まれて可愛いものよ」

まるで酒に酔ったかのように頬を火照らせたネメシスは、逸物に顔を近づけていくと、口を開き、舌を出し、ペロリと舐めた。

「ご主君。そのような汚いものを口にされては……」

「よい。これはわたしのものだからな」

「オレのもんだ」

主従の会話にヘリオードが抗議すると、ネメシスは呆れた顔で応じる。

「まだそんなことを言っているのか。貴様の身体は、逸物はもちろん、髪の毛の一本にいたるまでわたしのものだ。早くそのことを自覚しろ」

右手で握りしめた肉幹をシコシコと激しく上下させながら、左手では顔にかかる赤紫色の髪を押さえたネメシスは、亀頭部の先端をアイスキャンデーか何かと勘違いしたかのようにペロペロペロと舐めてくる。

「くっ……」

射精欲求が一気に跳ね上がり身悶える男に、手を休めずにネメシスからは冷たい視線が来る。

「出したいか？」

「……、そ、そりや……ここまでされたら」

射精したくないわけがない。不承不承に認めるヘリオードに、ネメシスは冷笑する。

「貴様がわたしに忠誠を誓うのであれば、このまま出させてやるぞ」

「だれが……」

「強情なやつだ。しかし、だからこそ落とし甲斐がある」



意地になって吐き捨てる捕虜の逸物を、ネメシスはぱくりつと頭から咥^くえた。そして、
ジュルジュルジュルと吸り上げながら、頭を激しく上下させてきた。

（うお、気持ちいい……チンポが溶けるう）

憎い女の紡ぎ出す技とはいえ、逸物に來る刺激はどうしようもない。

初めてのフェラチオ体験に、男の欲望は一気に駆け上がる。

しかし、男として、侮られ嘲笑されながら射精するなど矜持が許さない。必死に丹田に力を込めて耐える。

「ふっ」

生意気な、といったげな冷笑を浮かべたネメシスの口戯はさらに激しくなる。まるで尿道を通して、睾丸から直接、精液を吸り出そうとしているかのような吸引だ。

ジュパツジュパツジュルツ、ジュジュ……。

卑猥な吸着音を立てながら、男の敏感な部分への集中攻撃は止まらない。

（ち、ちくしょう。も、もうダメ……だ）

もともと童貞であつた上に、散々にクンニをさせられたあとだ。牡の身体は否応なく高まっていた。

「くあっ」

絶望の呻き声と同時に、忘我の境地に達したヘリオードは逸物を爆発させた。

ドビュドビュドビュドビュ……!!!

勢いよく噴き出す牡液は、傲慢なる淫女の口内に注ぎ込まれていく。

「んぐっ、ん、んん……」

逸物の先端にしゃぶりついたまま、ネメシスは吸引を続けていた。

「ふう……」

すべてを出し終えたヘリオードが、満足の溜息をついたところで、ようやく終わったと察したのだろう。ネメシスは器用に、小さくなった逸物を吐き出す。

口内いっぱいに精液が溜まっているネメシスは、眉を寄せて、軽く左手の甲で口元を押さえた。

「ご主君、こちらにお吐き出してください」

カディアはタオルを差し出したが、それを振りきったネメシスは、周囲で見学している女たちの中からシャーミーナを手招きする。

「な、なんでしょう……？」

戸惑いながらも近づいてきた純粹無垢な美少女の両頬を、ネメシスはいきなり両手で捕らえた。そして、唇を重ねる。

「むー……!？」

亡国の姫君の大きな目が、さらに大きく見開かれた。

しかし、構わずネメシスは上から覆いかぶさるように接吻する。当然、ネメシスの口内に溜まっていた粘液は、シャーミーナの口内へと流し込まれる。女の唾液によって薄まっ

た男汁を、少女はなすすべもなく嘔下^{えんか}していく。

「ぶはっ」

すべてを移し飲みにさせたネメシスは大きく喘いだ。

「どうだ。おまえの惚れている男の精液だぞ。飲めて嬉しからう」

「は、はい。でも、その……これ、わたくしのファーストキスだったんです」

困惑顔のシャーミーナの返答に、ネメシスは声を上げて笑った。

「あはは、おまえは本当に可愛いやつだ。おまえはこいつと違って従順だからな。ご褒美をやるう」

「ご褒美ですか？」

いたいけな少女は怯えたような顔で、意地悪お姉さんの顔色を窺^{うかが}う。

「ああ、わたしは忠実に自らの責務を果たす部下には寛大な主君だ。そうだな、おまえへのご褒美といえば、やはりこいつであろう。どうだ。このままこいつと繋がってみるか？」

「え？ つ、繋がるって……」

目を白黒させるシャーミーナに、ネメシスは莞爾と笑う。

「もちろん、セックスしていいと言っているのだ。入れたいのだろ。こやつの浅ましい逸物を、おまえのおま○この中に」

「そ、それは……はい」

戸惑い恥じらったシャーミーナだが、やがて決然と頷いた。

「素直で結構なことだ。では、特別ご褒美だ。こやつのちんぽを挿入するといい」

ベッドに上げられたシャーミーナは、ネメシスに白いスカートの裾をたくし上げられた。あらわとなったむっちりとした女の子らしい健康的な臀部に、ピンク色のショーツが穿かれていた。

本人の意思を無視して進む展開に、たまらずヘリオードが抗議の声を上げる。

「ちよ、ちよつと待て。おまえオレのチンポをなんだと思ってやがる」

「ん？ だから何度も言っているだろ。貴様の逸物はもちろん、髪の毛一本にいたるまでわたしのものだ」

煩いといったげに応じたネメシスは、手中の少女のショーツを脱がせてしまった。

「きやつ」

ネメシスの陰部はじろじろと観察したヘリオードだが、清純派のシャーミーナの陰唇を覗くなど目が潰れるような気がして、視線を逸らす。そして、必死に訴った。

「シャーミーナ姫、わたしの身など案じてそのような女の言いなりになりますな！」

しかし、辱められているシャーミーナの返答は意外なものだった。

「だって、わたくし、ヘリオードさまと繋がりたいのですもの」

「いや、しかし……」

まっすぐな好意が痛い。その率直な訴えにヘリオードは反論の言葉を失ってしまった。「わたくし、ヘリオードさまが大好きです。だから、おちんちんを入れてもらいたい」

いに熱い液体が溢れ返る。

どびゅびゅゆゆゆゆゆゆ!!!

「あああ、いっぱい、いっぱい、くる。入ってくるうううううう!!!」

ビクンビクンビクンと逞しい女体は、激しく痙攣している。

膣内射精されたカディアは、一緒にイってしまったようだ。

「おいっ、まだまだオネンネには早いぞ」

一度射精したただけではヘリオードは収まらなかった。そのまま腰を動かし続ける。

※

「……よかったぜ」

結局、抜かず三発をしてしまった。事が終わったあとにも逸物は抜かず、カディアの逞しい身体を抱き締める。

全身を淫汗で濡らしたカディアも、男の身体にしがみついていた。

「おまえおっぱい好きだな」

「ん？ いや、まあ、おっぱい嫌いな男はいないだろう」

「そうなのかもしれないが、おまえはずっとおっぱいを触っている」

カディアの視線を追うと、ヘリオードの手がいまだに彼女の乳房を握っている。

「ああ、そういえばそうか……。おまえのおっぱいは揉み応えがあつていいというものもあるんだろうが、オレはどうもおっぱいに飢えていたみたいなんだ」

「おっぱいに飢える？」

カディアは不思議そうに小首を傾げる。

「ああ、おまえも知つての通り、オレはこのところ連日、両手足を縛られた状態で逆レイプされていただろ。あいつらは騎乗位で腰を振りまくりながら、巨大なおっぱいを振り乱し、自ら揉みまくっていた。オレはそれをずっと見ているしかなかったんだぜ。トラウマになるだろ」

「……そうか、わかった。おっぱい好きのおまえのために奉仕してやる」

どこまでも真面目な顔でカディアは、ヘリオードにぶつ壊れたベッドの縁に腰をかけるように促した。

「これでいいのか？」

「ああ、そのまま股を開いていてくれ」

膝立ちになったカディアは、男の膝の間に入って、両手で乳房を持ち上げた。

「こういうのは、男が好きだと聞いたことがある。特におまえは好きそうだな」

恥ずかしそうにはにかんだ武闘派娘は、半萎えの逸物を肉感的な乳房の狭間へと包み込んだ。

そして、モミモミと揉み込んできた。

「ああ、おっぱいはいいな」

思わず歓喜の声を上げてしまったヘリオードは、たちまちのうちに逸物を隆起させてし

まった。

「ふっ、現金だな。またカチコチになってしまった……。おまえのような男を絶倫というのだろうな」

男の昂りを包み込んだカディアは、愛しくてたまらないといった表情で揉みしだく。

逸物はすでに、愛液と精液が混じりあった液体によってドロドロになっていたから、それが潤滑油となって胸の中で踊る。

グチュグチュグチュ……。

卑猥で粘着質な水音を立てながら、定期的に乳肉の谷間から飛び出す亀頭部を恍惚として見下ろしていたカディアは、もうたまらないといった表情で口を開き、赤い舌を伸ばすと、亀頭部をペロペロと舐める。

「ああ、生臭い。生臭いけど美味しい♪」

美味しいはずはない。しかし、美味しいと思ひ込もうとしているようだ。

この心根が男には愛おしい。思わず頭を撫でてしまった。カディアは嬉しそうに目を細める。

「強い男の精液はよい。ネメシスさまはさすがに意思が強いな。アタシはこんな凄まじい男の逸物を前にしてはとめどが利かぬ」

まるで酒にでも酔ったかのように頬を火照らせながらカディアは、乳肉の中の逸物を愛しげに揉み、亀頭部を舐め吸い続ける。



どサドのイメージのある主君が、じつはどマゾでした、という現実はなかなか受け入れがたい現実であろう。カディアはなんとも複雑な表情で立ち尽くす。

そんな観客の戸惑いなど無視して、ネメシスが懇願してきた。

「ヘリオード、ご褒美が欲しい♪」

「ご褒美？」

首を傾げるヘリオードに、痴情に蕩けたネメシスは頷く。

「ああ、本日のおまえの調教に耐えきったご褒美として、チンポ、しゃぶらせて欲しい……」

「いいのか？ シャーミーナ陛下やカディアの前だぞ」

一応、ヘリオードが確認するが、ネメシスは陶酔の表情で頷く。

「うん、わたしがヘリオードの女になったんだってところを見てもらいたい♪」

「まったく、もう開き直ったか。まあ、いいぞ」

ベッドから立ち上がったヘリオードは、ズボンの中から逸物を取り出す。

なんだかんだ言って、すでにギンギンに勃起している逸物は勢いよく飛び出した。それをネメシスは恍惚と見上げる。

「ああ、ヘリオードのおちんちん♪」

念願の逸物を両手でしっかりと握りしめたネメシスは、亀頭部をパクリと啜えた。

「あむ、あむ、あむ……」

このように実に美味しそうに逸物をしゃぶる女が、かつては同じ逸物を足下に踏みつけ、顔面騎乗で無理やり舐めさせていたとは、目の前で見てもなかなか信じられるものではないだろう。

唾然としている観客の前に、愛しくてたまらないと全身で表わすかのように、頭から唾えるだけでなく、横啜えにしてみたり、手で扱いてみたりと、実に多彩に楽しませてくれる。

ジュブ、ジュルジュルジュル……！

卑猥な水音を立てて、肉棒を吸りまくる女の性戯は日に日に上達しているのが、男には身をもつてわかる。

それでいて眼下では、引き締まったお尻がクネクネクネと踊っている。

まるで犬が尻尾を振って喜んでいるようであり、早く自分の中に入れて欲しいという牝犬のアピールであろう。

(まったく、困った女だな)

ヘリオードは手を伸ばし、赤紫の頭髪を撫でてやる。そして、その耳元で囁いてやった。「そろそろ限界なんだが、口とおま〇ことアナル、どこに出して欲しい？」

いきり立つ逸物から口を離れたネメシスは、恥ずかしそうに頬を染めながら答えた。

「そ、それは……おま〇こ」

口も膣穴も肛門もいずれの穴でも楽しめる変態女でも、やはり膣穴が一番気持ちいいら

しい。

「ヘリオードのこの逞しいオチンチンでガッツンガッツンと犯されて、熱い液体をいっぱい、いっぱい注ぎ込まれたい」

愛しい男の前というだけではなく、同性の視線のある前で自らの浅ましい願望を告白したことは、ネメシスの性感を一段と高めているようだ。

それを見る男もたまらない。

「ああ、たつぷりやつてやる。おまえがただの牝だつてことを、シャーミーナ陛下やカデアに見せてやろうぜ」

猛り狂う悍馬かんばのようにいきり立ったヘリオードは、ベッドに跳び乗るや、ネメシスを押し倒した。そして、大股開きになると、ぱっくり割れた陰唇に、逸物を叩き込もうとした。

「お、お待ちください……」

いままさに野獣となった男女が結合しようとしたところに、切なげなシャーミーナの声が聞こえてきた。

「ヘリオードさま！ わ、わたくしも……!?!」

振り向くとそこではドレス姿のシャーミーナが、立ったままスカートをたくし上げて、自らのショーツの中に右手を入れていた。どうやらオナニーしていたらしい。

自分でも恥ずかしいことをしてしまっているという自覚はあるのだろう。顔を真っ赤にした少女は、それでも訴えた。

「ネメシスさまのお姿を拝見していたら、わたくし変な気分……」

女王陛下下の自洗婆に、ヘリオードは新たな欲望が湧いてきた。

「なら、シャーミーナ陛下も参加しますか？」

「え……。でも、ネメシスさまが……」

ヘリオードが、ネメシスの恋人になった以上、自分の入り込む余地はない、と考えているようだ。

ほんと慎ましい性格である。

「いいよな。ネメシス」

「うん。ヘリオードがそれを望むのならわたしは何をされても構わん」

すっかりマゾとして目覚めてしまっているネメシスは、大股開きで男を迎え入れる姿勢のまま、恥ずかしげに頷く。

「さあ、シャーミーナさまもこっちに来てください」

なおためらっているシャーミーナの腕を取ったヘリオードは、無理やりベッドの上に引き上げた。

そして、その背後に回ると、白いスカートの中に手を入れて、白いショーツをするすると脱がしてしまう。

「あん♪」

ヌラーツとショーツと股間の間を透明な糸が引いた。

「シャーミーナ陛下のおま〇こも結構すごいことになっていますね」

「だって、ネメシスさまのあのようなお姿を拝見していたら♪」

羞恥の中に媚びを含んだ声は、まさに男を誘う女の表情だ。これが山麓朝の最後の当主となる、悲劇の女王とはだれが信じられよう。

「それじゃ、ネメシスとおま〇こを擦りあわせてみますか？」

「お、おま〇こを擦りあわせる？」

意味がわからないらしくシャーミーナは戸惑いながら、ヘリオードの顔を窺う。

「ええ、貝合わせといって女同士で楽しむ方法です」

「わ、わかりました。やってみます」

女王陛下が納得したことで、ヘリオードはまずネメシスの両脚を上体につくほどに持ち上げさせた。それから、その両の太腿をシャーミーナに跨らせて、女たちの陰唇を重ねあわせる。

ピトッ！

「はうっ♪」

男根を待つていた女性器に、女性器を重ねられたのだ。その思いがけない刺激にネメシスは身悶えた。

男と女であったなら、笹船本手といわれる体位である。

「はう、吸いつく。ネメシスさまのおま〇こ、吸いついてきます♪」

まるで女性器同士がキスでもするかのように、ヌチャヌチャと粘膜が吸いあつた。その初めての刺激にシャーミーナとネメシスは、驚きながらも悩乱の声を張り上げる。

「ああ、シャーミーナ陛下のおま〇こ気持ちいい♪」

痴情に狂った女二人は、夢中になつて陰唇を擦りあわせる。

グチュグチュグチュ……！

なんとも卑猥な水音があたりに響き渡る。

それは女同士でしか味わえない快感なのだろう。男としては羨ましくもあり、しかし、この上ない眼福だ。

そして、いま一人その光景を目の当たりにしていたカディアが叫んだ。

「ネメシスさま、アタシもご奉仕したいです！」

「ダメだ。わたしに決定権はない。わたしはヘリオードのペットなのだからあ♪」

蕩けきつているネメシスの返答に、切迫したカディアは、問題の男のほうを見た。

ダメだと言ったら、切りかかつてきそうな気迫に苦笑しながら、ヘリオードは肩をすくめた。

「ああ、構わねえよ。こうなったら、無礼講だ。おまえも参加しろ」

「ネメシスさま、いま参ります」

主君にべつたり惚れてしまっている女騎士は、鎧を脱ぎ捨てるといそいそとベッドに上がった。

しかし、愛する主君の上にはすでにシャーミーナが覆いかぶさってしまっている。

どうしたものかと立ち尽くすカディアの背後から紫色のインナーをはだけさせ、勢いのある乳房を揉みながらヘリオードが命じた。

「おまえはこのままネメシスの顔面に跨れ」

「そ、そんな……ネメシスさまの顔に跨るなんて恐れ多い」

カディアはイヤイヤと首を振ったが、ヘリオードは容赦なかった。

無理やりネメシスの顔を膝立ちで跨がせるとインナーのまたぐりを横にずらし、陰唇を露出させる。そして、肉裂に指をかけ左右に割った。

「ネメシス。どうだおまえの忠臣のおま○こは」

「ああ……綺麗だ。すごい濡れている。わたしの痴態を見て濡れてくれたんだな」

「だってよ。ほら、いいから、座っちまえ」

抵抗するカディアのくびれた腰を抱いたヘリオードは、無理やり腰を降ろさせた。

「ああ、ネメシスさま申し訳ありません。あ、いけません。ああ、ネメシスさまがアタシのおま○こを、あ、そこは、そこをそんなに吸われては、ああ、ネメシスさま!! お許しください♪」

主君に顔面騎乗してしまったカディアは目に涙を溜めながら歓喜に震えた。その光景を目の当たりにしたシャーミーナは目を丸くする。

「カディアさんって、怖い人だと思っていましたけど、意外と可愛いんですね♪」

お堅い親衛隊長の悶える顔を見て悪戯心を起こしたのだろう。シャーミーナは身を伸ばすと、カディアの唇を奪った。

「はむ、ん、うん……♪」

もはや理性が蕩けてしまっている二人は、夢中になって濃厚な接吻を交わす。そうしながら興奮のあまり腰が動いてしまい、それぞれの陰唇をネメシスの陰唇と顔面にこすりつけてしまっている。

もつとも権力を持ったはずのネメシスが、他の女たちの玩具だ。

（くうくたまらねえな）

愛らしい三匹の牝猫の絡みあっている光景を見守りながらヘリオードは生唾を飲んだ。同時に彼女たちの意識がいずれも、自分に向いていることをヒシヒシと感じる。

我慢の限界に達した男が、まずどの女に叩き込んでくるかを、固唾を吞んで見守っているのだ。

そのことが痛いほど感じられただけにすぐに動くのも癪に障る。

「あん、ああ……あん……」

なかなか動かない男を誘おうと、女たちの嬌声は激しいものとなっていく。そんな男と女たちの駆け引きの中、ついに焦れて懇願の声を上げたのはシャーミーナだった。

「ヘリオードさま、わたくしこうやって女性同士で睦みあうよりも、やつぱり……ヘリオードさまのおちんちんのほうが……」

「あ、おまえ、抜けがけしようというのか！　アタシだって早くヘリオード殿のおちんちんが欲しい」

「わ、わたしだって欲しいぞ」

上の女たちの喧噪を聞いたネメシスも、懇願してきた。

「わかった。わかった。もう少しそのまま楽しんでいろ」

我こそ挿入しろと訴えてくる三匹の牝たちを宥めたヘリオードは、やれやれと言いたげに、その実、我慢の限界に達したいきり立つ逸物を持って、彼女たちの周りを回った。

（さて、ほんと、だれから入れたもんかな？）

引き締まったカディアの肉体、女の子らしい柔らかさのあるシャミーナの肉体、そして、非人間的なまでに美しいカディアの肉体。いずれも男にとっては極上の獲物だ。いずれに挿入しても、存分に楽しめることだろう。

いろいろ思案したヘリオードだが、シャミーナとネメシスが貝合わせをしているお尻を前に止まった。

旧主と新主の陰唇が卑猥な粘液とともに繋がっている。その狭間に、鉄さえ貫きそうに猛り狂う逸物を近づけた。

ズブッ！

「ああっ！」

「ひいん♪」



女性器と女性器の間に逸物が押し込まれた。

ヌチヨ……と、熱く濡れた粘液が、上下から逸物に浴びせられる。

（ああ、これはなかなか……）

亀頭部の上下に、コリコリとした陰核が引つかかるのがわかる。

女二人に素股されるという珍奇なる体験に、感嘆したヘリオードは夢中で肉棒を出し入れさせた。

ヌチヨヌチヨチヨ……。

「ああ、ヘリオードさま、は、早く入れてくださいっ！」

「ヘリオード、わたしのほうに早く入れてくれっ！」

シャーミーナもネメシスも、すでに高貴なる身としてのプライドを無くして、ただの牝に墮してしまっている。

（まったく可愛いな）

男としてもはや我慢の限界だ。どちらか一方の膣内に入れて射精しなくては収まらない。しばし逡巡したヘリオードだが、逸物の切っ先を上下の穴の一方に押し入れた。

「ああっ！」

歓喜の悲鳴を上げたのは、上になっていたシャーミーナだ。

亡国のお姫さまの膣穴が、逸物をキュツキュツと絞めてくる。

「いくぞっ！」

雄叫びを上げたヘリオードは一気にトップスピードで、小柄な体軀をザクザクと突き回す。その振動は下になっているネメシスにも伝わっているはずだ。

「あつ、あつ、あつ、あつ ヘリオードさま！ ヘリオードさまっ！ ヘリオードさまっ！」

愛しい男の逸物を胎内に感じた少女は随喜の涙を流して悶えている。

（くう、シャーミーナさまは、山麓朝の最後の国王になった。最後までオレが責任を持つて守って差し上げないと）

傀儡の王として祭り上げられた彼女にとつて、もはや頼れるのは自分だけなのだ。

男として旧臣としての義務をひしひしと感じながら、シャーミーナを絶頂へと導く。

「ひいああああああああ!!!」

ドビュドビュドビュドビュ……!!!

シャーミーナの絶頂に合わせて、その胎内に思う存分に射精したヘリオードは、逸物を引き抜いた。

「あん……♪」

再び、シャーミーナの陰唇とネメシスの陰唇が接吻した。

ドプドプドプ……。

美少女の膣穴から逆流した精液が、そのまま美女の膣穴へと注ぎ込まれていく。

ネメシスとしては、当然、次に自分に入れてもらえるものと思ったことだろう。しかし、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃】



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集
しているようです

【小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ】



女幹部メル様の
セカイ征服計画!

【小説…高岡智空 / 挿絵…鈴眼依縫】

2010
8月下旬
発売予定!!



悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

既刊LINEUP ● 仙聖字態戦姫ノブナガツ ①～③
● 灼爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になつて踊る愚者の夜

● 借金お嬢クリス ①～③
● プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の姫騎士がDMICに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 呪詛喰らい部【カースイーター】
● 魔海少女ルレイエル

http://ktcom.jp/index2.htm

KTC - KILL TIME COMMUNICATION...

おかげ様で46期!

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はここからどうぞ!

ほしいものちょっとかも...

会社概要 通販ご利用方法 広告掲載案内 お問い合わせ プライバシーポリシー

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

コミックアンリアル
コミックアンリアル
アンリアル
検索

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

最新情報満載!
最新情報満載!!
フルテキストライトはこちら!
ゲーム化!
ダウンロード

VALKYRIE



http://www.comic-alkyrie.com/

cranberry



http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
ミルフィーユ



http://www.mille-feuille.jp/

**モバイル二次元
ドリーム**



http://www.2d-dream.jp/



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!